

より百人許寄候て、此方を追上可申と仕處に、兄弟三人と仕、先に進み申者を切立、七・八人に手を負はせ追立てたり。此様子も長屋平左衛門被存知候。又金森法印に飛州を被下、法印は上方へ被罷登留守中に、國之半人并一揆共取立、在々放火致し、宮と申所之城を取巻候に付、金森出雲守へ手遣被仕處に、我等も先懸致し、一番に首を取りたり。右之様子水野内匠・長屋平左衛門可被存知。又飛州に而、金森法印入國之刻、國之半人の内徒者共、川原へ引入りて、在々へ夜討を入、百姓共迷惑仕に付、我等も才覺致し、彼徒者共を搦取申歟、討捨にても仕候へと被申付に付、方々相尋候處、折節紛者に罷成、大坂と申處罷通を見合候て、四人搦取、高原と申處より引上候。此儀は長屋平左衛門能々被存知候。とあり。按ずるに、金森譜に、長近自幼齡仕織田信長公。天正三年信長征加越之三州。長近發自濃州。入越州大野郡。拔城擊賊者若干也。信長感之。賜長近以大野郡云々。同十四年領飛驒一國。と見ゆ、藩翰譜にも、天正十四年に飛驒國を領し、高山に住す。是年比の軍功を賞せられしなり。あり。齋藤内藏助が武功を顯

したるも、天正年中の事なるを知るべし。但し明智光秀の家老と同名也。
 ○横山氏家士廣瀨民部傳
 元和二年武功書に云ふ。五百石廣瀨民部、生國越前之者に而、信長之御代柴田修理越前入國、豐原と申處に柴田伊賀在城被仕候處、越前河より北一揆悉く起り候に付、高木の川端迄北庄より人數出候處に、柴田源左衛門馬上一・三騎、步者以下二拾人許にて、高木の河を越、伊賀守居城へ懸付候處、一揆共取巻有之を突割城へ入時、我等敵首を討取候。又肥前守様松任に御座被成時分罷出、關東御陣八王寺にて太刀疵を負ひ、首一つ取り、肥前守様懸御目候。大聖寺御陣之時分、二・丸にて矢手を負ふといへども、屏を乗越え、首を討取り、則愛宕山にて肥前守様懸御目。御歸陣之後、山城守大聖寺表穿鑿被仕、知行二百石加増被致。去年大坂御陣には金澤に用所被申付相立不申。とあり。按ずるに、越前は天正三年八月信長公出馬有りて、朝倉の餘黨を征伐せられ、柴田勝家に賜はり、北庄を居城とせしが、同十一年四月勝家一族悉く滅亡す。此の時佐久間盛政の舊領を前

田家へ賜はり、利長卿加賀國石川郡松任城へ移住し給へり。さて關東北條征伐八王寺城攻は、天正十八年なり。されば廣瀨民部が武功を顯したるも、天正の初以來なる事知るべし。

○横山氏家士木村權兵衛傳

元和二年武功書に云ふ。四百石木村權兵衛、先年高島石見守所に罷在候處、大納言様と佐々内藏助と取合之刻、石見守能州へ加勢に被遣、大納言様御人數御取懸之處、敵惣構之外に取懸、先手衆と殊之外せり合有之。其より本丸二之門口迄乘込候處に、門を開く音仕候へば、何も迷崩ける處に、長田權右衛門・我々傍輩森小重郎・野々村五助・我等居残り候。右之様子長田權右衛門被存知候。又高島石見守家來遠山甚丞と申者、白山より走り金澤に罷有處、口々に相待、一口にてしのがしける處、拙子參合、散々切合ふといへども勝負不付、飛懸り組合ける處、岸田治左衛門參り合候て助ける故、拙子切留めたり。其様子治左衛門能く存知候。又關東御陣之刻、大納言様上野之内松枝の城御取巻被成處に、長・高島兩人して丸一つ御取被成。其丸を取堅め

兼候處、拙者罷出、一番に竹たば付候に付、其丸取堅る也。かやうの仕合、笠間平馬丞能々被存知候。山城守所に罷出候處、鐵炮之者被預。然處大聖寺の城御攻被成、鐘の丸一番乗仕、鐘手四々所迄負候に付、肥前守様御前へ一番に、林庄太郎取次を以、愛宕山にて御目見仕、御感に預り、御陣ひけ、山城守穿鑿を被逐、爲加増二百石被與、一倍之加増取候者拙者一人也。又去年之御陣之刻、のぼりを被預、岡山口をおつ崩し被成に付、何れものぼりを射ぬき候て、大坂へ押込、町之内にて首を取り、其より大坂圖書丸へ着、山城守のぼりを御家中一番に入候。のぼり差一人被討、堀をやぶり一番乗仕處に、廣庭へ敵突出候處、鐘を合せ、具足を二ヶ所迄、其上鐘際之鐵炮に被討候。則加藤石見殿能々被存知、安彦左馬殿も御覽可被成、其場にて山城守侍共渡邊大學・田中八右衛門・高澤猪右衛門・堀口宗兵衛、以上四人討死仕、其丸にて山城守者共手を摧き、其丸を取候。則眞田丸に而、山城守我等を召連、殿様御前へ罷出、御感に預り候。とあり。三州志に、諸士賞譽の時、横山山城家士木村權兵衛、伴太左衛門へは、各白銀二枚・帷子二つ・單